

## 『ジョージ・オーウェル日記』を 転読して

—ナメクジと蛇とエトセトラ—

西川 伸一

『ジョージ・オーウェル日記』の「序」によれば、オーウェルは日記をつけるのが「根っから好き」で、「偏執的に」日記を綴っていたという（邦訳7-8頁）。彼の「家事日記」に倦むことなく記録されている卵の数をみるだけでも、その入れ込みようは容易に想像できよう。

私はこの大部の『日記』を転読したにすぎない。それでも、オーウェルの個性あふれる書きぶりにはしばしば驚きを禁じ得なかつた。中でも目を留めたのは、ナメクジについての記述の詳しさである。私からすれば敬遠したいこの軟体動物を、オーウェルは実に丹念に描いている。

たとえば、「雨後に、大きなナメクジが這い回っていた。一匹は三インチほどあった。大きな孔があつた、たぶん、耳穴だろう。頭部の少し後ろ。はつきりと二色に分かれている。明るい淡黄褐色のものと白のものだが、両者ともに、腹部の縁に沿つて鮮やかなオレンジ色の帯がある。」（1938年8月22日；98頁）

ナメクジを見るだけで私は気持ちが悪いのだが、なんという観察眼だろう。しかも、オーウェルのナメクジ観察はこれに尽きない。ほぼ1年後に再びしたためられる。

「きのう、一年の今頃よく見かける大きな黒いナメクジ（体を伸ばすと約四インチ）を調べると、頭のちょっと後ろに奇妙な孔があり、それが幾分リズミカルに開いたり閉じたり

りし、中にサゴ・ブディングに似た白っぽい組織がある。ナメクジの呼吸孔ではないのだろうか？」（1939年8月3日；209頁）

ちなみに、サゴとはサゴ椰子の幹からとった白色の米粒状のでんぶんで、これをプリン状に固めてシロップをかけたものが、サゴ・ブディングなのだそうだ。ナメクジの部位を形容するのにデザートを思いつくとは恐れ入る。

あるいは「ナメクジがどんな種類の食べ物を一番好むか知りうと、用意した箱にナメクジを入れた。」（1939年8月7日；212頁）残念ながら、この実験結果についての言及はない。さらに「信じられないくらいの量のナメクジ——巨大な大きさの黒いもの。きのう、A・Iと私はキヌアクリドラクから戻る途中、小径だけを歩いて何匹ナメクジを踏み潰すことができるか試してみることにした。泉からこの家まで、つまり約一マイルの距離で、その数は百二だった。」（1946年8月26日；483頁）

私なら見つけたらぎょっとしてよけて通るに違いないナメクジを、踏み潰しながら1マイルも歩くとは、まさに「信じられない」。そして、晩年ジュラ島に移つてからは、ナメクジ退治に精を出している。

「ナメクジが最後のベボカボチャを食べてしまった——生き残るかもしれないが、ナメクジは生長点を食い尽くした。昨夜、周りに煤と砂を輪状に撒いてあるにもかかわらず、巨大なナメクジがそれを食べているところを発見した。」（1947年6月29日；536頁）「昨夜、ナメクジ退治にメタを混ぜた穀を撒いてみることにした。今朝、かなりの数のナメクジが死んでいた」（1947年6月30日；536頁）

ナメクジが夢に出てきそうなので、もうこれくらいにしておこう。

一方、蛇殺しの描写もなかなか迫力に満ちている。「蛇を一匹殺した。色は茶で、長さは約十八インチ。背中に一種のジグザグ模様があった。鎖蛇かどうか、またもよくわからぬが、R〔リチャード〕の安全を考え、家

の近くに来る蛇はすべて殺すことにした。殺す時、半分に切った。それから、調べてみると、安全だと思ったほうを摘み上げたが、それは頭のほうで、その頭は即座に私に噛みつこうとした。」（1946年6月2日；459頁）

蛇を半分に切って調べてみるなど、考えるだけで鳥肌が立つてくる。「非常に大きな蛇を一匹殺した。」（1947年6月1日；526頁）「きのう、畑で小さな蛇を殺した。」（1947年8月3日；546頁）「きのう、干し草用の畑で蛇を二匹殺した。」（1947年8月9日；548頁）蛇殺しもここまで書かれると、あとで祟られるのではないかと心配になってしまう。

ところで、上述のとおりオーウェルは執拗なまでに、その日に採れた卵の数を連日記している。当然その卵を落としてしまうこともあるはずだ。しかし、『日記』でそれが記された箇所は、私の気づいた限りでは次の1か所だけである。「卵十七個。落としてしまい、全部割れた。例外なくすべて割れるなどということはないと思ったが、全部割れたのだ。」（1940年4月11日；287頁）

ここから私は、『動物農場』におけるメンドリたちのナポレオンに対する抗議行動を連想した。「ジョーンズの追放以来、初めて、反乱に近い事件が生じたのです。3羽の黒いミノルカ種の若鶏を先頭に、牝鶏たちは、ナポレオンの要請撤回を求める果断に踏み切りました。牝鶏たちは、一斉に垂木に舞い上がり、そこで卵を産み落とすという手段をとったのです。卵は、床に落ちて割れてしましました。」（大石健太郎訳『動物農園』136頁）

ナポレオンがウインパーを通じて毎週400個の卵を売却する契約を結んだことが、反乱の発端であった。オーウェルは卵がいくらで売れたかも、時々日記に残している。

最後に、編者注でDouble British Summer Timeという存在を知ったことを書き添えておこう。サマータイムは周知のとおりだが、イギリスでは「戦時中とその直後の数年、一年を通して一時間進められ、「夏」の期間はさらに一時間進められた」（557頁）のだった。

昨年末にサモアが自国の標準時を日付変更線の東側から西側の時間帯に移行させ、話題になった。これによりサモアは日の出が最も早い国になった。時間帯を移すことで、サモアは主な貿易相手国であるオーストラリアやニュージーランドとの時差を飛躍的に短縮させた。

自然の時間を国家の都合でどこまで調節できるのか、興味深いところである。